

FD NEWS

No.23 2008年4月21日
摂南大学 FD 委員会
〒572-8508 寝屋川市池田中町 17-8
TEL: 072-839-9106
E-mail: kyomu@ofc.setsunan.ac.jp

摂南大学 

財団法人大学コンソーシアム京都主催「第13回 FD フォーラム」に参加して

FD 委員会委員・薬学部 FD 委員長 秋澤敏史

2008年3月8日(土)と9日(日)の2日間立命館大学衣笠キャンパスにおいて財団法人大学コンソーシアム京都主催による「第13回 FD フォーラム」が開催され参加してきた。今回のテーマは「大学教育と社会 - FD 義務化を控えて - 」であった。初日の基調講演は寺崎昌男先生が体調を崩され中止となったため急遽シンポジウムが繰り上げとなり十分時間をとって行われた。コーディネーターの河原地先生の司会で中村正先生(立命館大学)、飯吉弘子先生(大阪市立大学)、滝紀子氏(河合塾)の3名の講演の後、パネルディスカッションが行われた。中村先生の講演では学習者が中心となる教育をどのように構築すればよいのかという内容で、学びのシステムとスタイル、学びのコミュニティ、脱学習としての学びなどのキーワードが挙げられたが、個人的には、常々意識してきた「人が人を育てる」という講演で述べられた言葉に教育の原点があると感じた。その意識の強さが自発的なFDに繋がっていくのだろう。飯吉先生の講演は産業界が学生に求めている力はどのようなもので、それに対する大学教授職の使命は何かという内容であった。今後は研究のあり方や教育の姿勢が、常に専門外の分野や社会からも問われ、教員が自分の専門分野に閉じこもって完結していればよいということではなくなってくるので、FDの本質と今後の可能性について再検討する必要があるという結論であったように思う。最後の滝氏の講演は非常に現実的な内容であり、少子化の時代に学生(高校生)や高校教員からの高い評価を得るために、学園全体としてまた各大学・学部としてどのようにすればよいのか示唆に富んだ内容であった。

翌日は9つの分科会と3つのミニ・シンポジウムに分かれて少数での討論が行われた。私の参加したミニ・シンポジウムのテーマは「地域社会の中の大学」というテーマで筒井のり子先生(龍谷大学)、奈良英久先生(立命館大学)、渡辺雄人さん・唐沢民さん(同志社大学大学院生)の講演が行われた。地域でのボランティア活動を中心とした活動であり、いかに学部の枠を超えた協力体制を構築し、正規のカリキュラムとして取り入れていくかということが成功の鍵のように思われた。また、大学院生の講演では2名とも非常に充実感と達成感が感じられボランティア活動の意義が伝わってきた。これらの講演内容は現代GPの活動として行われており、かなり成果が強調されていたが、将来的な継続性については今後の大きな検討課題であるとのことである。

最後に、プログラムには予定されていなかった講演について少しだけ感想を述べたいと思う。立命館大学が出資して立ち上げた株式会社(クレオテックとクレオヒューマン)の

活動に興味をそそられた。私は薬学部に所属しており、薬学部のおかれている状況の厳しさは認識しているつもりであるが、カリキュラムの再構築や受験生の確保に追われ、出口に関する組織だった活動には手がまわらない状況であると感じている。薬学部の存続には就職先の確保が重要なポイントになることは明らかである。薬学部は本校から離れており、平日頃は寂しい思いをしているが、逆に卒業生同士や教員との繋がりは強いように感じているし、企業の方からもそのように聞くことが多い。この絆を生かして、社会に出て活躍している卒業生の力を借り、『ファーマサポート摂南』あるいは広島国際大学と連携した『ファーマサポート常翔』というような会社を学園のサポートで起業できないものかと考えてしまった。

今回、FD委員会のメンバーとしてFDフォーラムに参加して少なくともいい刺激を受けたように感じている。

以上

2007年度後期「学生による授業アンケート」実施結果報告

FD委員会 (SG1)

1 実施状況

2007年度の学生による後期授業アンケートが、11月28日(水)～12月11日(火)の2週間にわたって実施された。

2006年度までは教員コード番号の奇数・偶数によって2グループに分けて実施されてきたが、外部評価との関係から全授業科目についての実施を要望する学部・学科があり、今年度はゼミ・実験・演習および履修者が10名以下を除く授業科目を対象として実施された。

アンケートの質問項目は、分析結果の経年変化を調べるため、2006年度と全く同じ内容とした。質問8、9についても2006年度と同様に学部個別質問項目として設けられたが、実際に質問を設けるかどうかはこれまでどおり各学部の意向に任せられた。質問10～14の学科教室個別質問項目、あるいは教員個人用の項目と自由記述式の回答欄も、2006年度と同じ内容である。

表1～3に今回の参加教員数、実施科目・実施率、回答者延人数・回答率の詳細を示す。

表1 参加教員数

所属学部 学科	専任				非常勤・兼任				合計				
	参加	不参加	計	参加率	参加	不参加	計	参加率	参加	不参加	計	参加率	
T	C	12	0	12	100.0%	1	0	1	100.0%	13	0	13	100.0%
	A	12	0	12	100.0%	7	0	7	100.0%	19	0	19	100.0%
	E	11	1	12	91.7%	13	1	14	92.9%	24	2	26	92.3%
	M	12	0	12	100.0%	1	0	1	100.0%	13	0	13	100.0%
	B	11	0	11	100.0%	4	0	4	100.0%	15	0	15	100.0%
	数物	10	0	10	100.0%	8	0	8	100.0%	18	0	18	100.0%
	計	68	1	69	98.6%	34	1	35	97.1%	102	2	104	98.1%
L	49	0	49	100.0%	89	0	89	100.0%	138	0	138	100.0%	
I	27	0	27	100.0%	17	0	17	100.0%	44	0	44	100.0%	
Y	30	4	34	88.2%	0	0	0	-	30	4	34	88.2%	
J	21	0	21	100.0%	10	0	10	100.0%	31	0	31	100.0%	
保体	3	0	3	100.0%	8	0	8	100.0%	11	0	11	100.0%	
合計	198	5	203	97.5%	158	1	159	99.4%	356	6	362	98.3%	

注1. 参加教員数は、所属学部・学科別に集計している。(1科目でも実施した場合は、参加にカウントしている。)

注2. 授業終了、共同担当者に任せられた場合等、授業アンケートに参加できなかった授業担当者については、上の集計表の構成員から除いている。

表2 アンケート実施科目数・実施率
開講学部学科別集計

開講学部 学科	実施科目数	
T	C	87
	A	58
	E	68
	M	62
	B	59
	計	334
L	261	
I	169	
Y	89	
J	101	
合併授業	34	
合計	988	

教員所属学部学科別集計

		実施科目数	不実施科目数	合計	実施率
T	C	54	0	54	100.0%
	A	29	0	29	100.0%
	E	37	2	39	94.9%
	M	32	0	32	100.0%
	B	30	0	30	100.0%
	数物	58	0	58	100.0%
	計	240	2	242	99.2%
L	455	4	459	99.1%	
I	105	2	107	98.1%	
Y	56	12	68	82.4%	
J	70	0	70	100.0%	
スボ振	39	0	39	100.0%	
合計	965	20	985	98.0%	

注 1. アンケート実施科目数は、開講学部・学科別に集計している。

(例：C科で開講している英語は、C科の実施科目として集計)

注 2. アンケートの実施は、合併授業と「卒業研究」、履修者が10名以下の授業、および演習・実習科目を除く
全授業科目とした。(対象外でも特に実施申し出のあった授業は実施している)

表3 回答者延数・回答率

開講学部 学科	回答者延数	履修登録者実数	回答率	
T	C	2,666	3,386	78.7%
	A	2,557	3,890	65.7%
	E	2,257	3,198	70.6%
	M	2,767	3,696	74.9%
	B	1,870	3,191	58.6%
	計	12,117	17,361	69.8%
L	5,910	8,837	66.9%	
I	5,391	10,520	51.2%	
Y	5,370	8,473	63.4%	
J	3,480	8,399	41.4%	
合併授業	1,386	2,753	50.3%	
合計	33,654	56,343	59.7%	

2 アンケート結果の分析

2.1 公開・非公開の違いによる評価結果の比較

公開・非公開の違いによる学生の総合満足度の平均値を表4に示す。

表4 公開・非公開の科目数と総合満足度(質問項目7)

	科目数(前期/後期)	満足度(前期/後期)
公開	265/336	3.78/3.82
非公開	730/635	3.84/3.99

前期と同じく、満足度の平均値は非公開のほうが、やや高くなっている。評価が低いから公開を拒否しているという訳ではないようである。図1a、1bに公開・非公開別の総合満足度の科目数分布を示す。

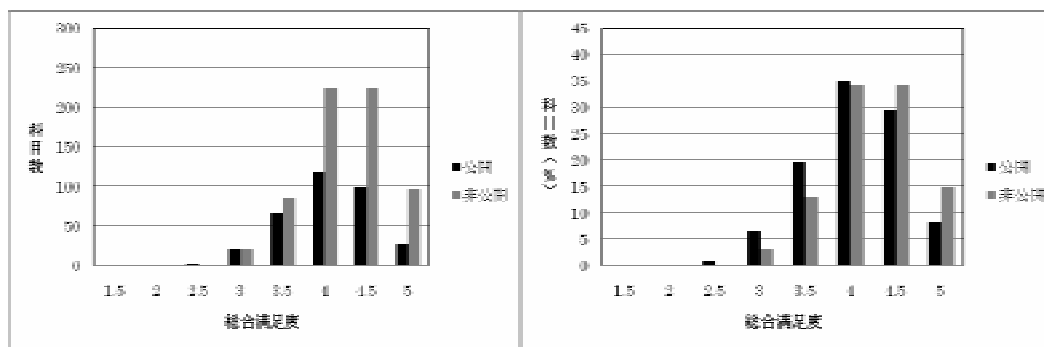


図1a 総合満足度の科目数分布

図1b 総合満足度の科目数(%)分布

アンケート結果の公開率を表5に示す。2006年度の公開率は前期13%、後期15%であったのに対し、2007年度は前期27%、後期34%であり、ほぼ倍増している。今年度より公開希望調査の方法を変更したが、この方法は公開率の向上に有効であったといえる。

表5 アンケート結果の公開率

	2006年度	2007年度
前期	13%	27%
後期	15%	34%

2.2 学部・学科ごとの結果(概要)

質問項目A1 - A7の平均値を表6に示す。

表6 学部・学科の平均値(前期/後期)(網掛けはdown)

開講	A1:出席	A2:意欲	A3:熱意	A4:工夫	A5:話し方	A6:設備	A7:満足度
C科	4.60/4.60	3.96/4.05	3.94/3.96	3.64/3.71	3.49/3.60	3.68/3.72	3.63/3.71
A科	4.47/4.44	3.84/3.93	3.87/3.98	3.67/3.81	3.59/3.73	3.66/3.76	3.67/3.79
E科	4.63/4.60	3.79/3.84	(3.82/3.86)	3.58/3.70	3.51/3.61	3.72/3.71	3.57/3.62
M科	4.63/4.64	3.87/3.78	3.94/3.91	3.69/3.65	(3.58/3.51)	3.79/3.74	3.68/3.62
B科	4.40/4.36	3.82/3.95	3.89/4.02	3.65/3.85	3.53/3.75	3.72/3.81	3.63/3.81
L部	4.39/4.30	<4.12/4.12>	<4.28/4.34>	<4.11/4.21>	<4.05/4.17>	<4.12/4.18>	<4.09/4.18>
I部	4.35/4.33	3.86/3.95	3.97/4.09	3.75/3.91	3.66/3.82	3.78/3.92	3.73/3.89
Y部	<4.66/4.71>	3.82/3.94	3.99/4.11	3.70/3.86	3.55/3.80	3.55/3.68	3.65/3.82
J部	(4.35/4.27)	(3.72/3.70)	(3.84/3.86)	(3.62/3.60)	3.54/3.55	(3.58/3.63)	(3.59/3.59)
全体	4.49/4.46	3.88/3.94	3.99/4.06	3.76/3.86	3.65/3.78	3.75/3.83	3.73/3.83

A3—A7について工学部M科のみダウンしている。全体の結果のA5(話し方)のダウンはこれに起因したものである。J部はA4(工夫)がダウンしているが、全体での評価には現れていない。前期後期における担当教員の違い(年齢、職階)によるや授業内容の違いによるものと思われる。

<>は最高、()最低を示している。L部がすべての項目において高い評価を得ているのに対して、J部が低い評価となっている。少人数教育の徹底、入学者数の増加、学生の資質の違い、教員一人あたりの学生数などの要因が考えられる。

2.3 各設問と満足度との相関

質問ごとの評価の最小値・最大値・平均値および質問7（満足度）との相関係数を表7に示す。学生の総合満足度と相関が高いのは、「教員の熱意」、「教員の工夫」、「教員の話し方」であり、過去の結果と同様である。

表7 最小値/最大値/平均値および質問7との相関係数

質問	項目	最小値	最大値	平均値	相関係数
A1	出席状況	4.35/4.3 4.24/4.26, 4.27/4.12	4.66/4.71 4.68/4.68, 4.66/4.66	4.49/4.46 4.46/4.47, 4.47/4.41	0.17/0.17 0.14/0.14, 0.14/0.14
A2	学生の意欲	3.72/3.7 3.62/3.75, 3.64/3.65	4.12/4.13 4.07/4.10, 3.94/4.04	3.88/3.94 3.87/3.95, 3.80/3.90	0.61/0.61 0.60/0.63, 0.62/0.61
A3	教員の熱意	3.82/3.86 3.88/3.81, 3.61/3.75	4.28/4.34 4.30/4.27, 3.96/4.24	3.99/4.06 4.00/4.09, 3.78/3.92	0.71/0.72 0.71/0.72, 0.74/0.75
A4	教員の工夫	3.58/3.6 3.58/3.57, 3.52/3.70	4.11/4.21 4.10/4.11, 3.83/4.17	3.76/3.86 3.74/3.88, 3.69/3.80	0.78/0.78 0.79/0.79, 0.80/0.81
A5	教員の話し方	3.51/3.51 3.51/3.51, 3.47/3.55	4.05/4.19 4.06/4.06, 3.78/4.15	3.65/3.78 3.64/3.79, 3.62/3.73	0.79/0.80 0.80/0.80, 0.81/0.83
A6	設備	3.55/3.63 3.60/3.60, -/-	4.12/4.18 4.05/3.99, -/-	3.75/3.83 3.75/3.78, -/-	0.53/0.60 0.54/0.57, -/-
A7	学生の満足度	3.63/3.59 3.55/3.52, 3.47/3.58	4.09/4.18 4.05/4.08, 3.78/4.15	3.73/3.83 3.70/3.84, 3.62/3.78	-
注1: 上段は、07前期/後期、下段は、06前期/後期、05前期/後期、網掛けは後期 down したもの 注2: A3は2005年度まで「質問への教員の対応」 注3: A6は2006年度から設定					

相関係数に大きな変化は見られない。

A3、A5、A6で変化が見られるが、A3、A5の差は少ない。A6については増加している。いずれにしても大きな変化は見られない。今後もこの傾向が変わるとは思われない。

出席状況と満足度の相関がみられない。

前期と同じく、出席はしているがそのことが満足度とは無関係であることを意味している。満足していなくても、出席しているということであるが、授業中の出席状況を考慮すると出席していなくても出席していると答えているようにも思われる。

「教員の話し方」に対する評価は低い。

教員の話し方に対する学生の評価は比較的低い（前期 3.65 / 後期 3.78）。前期も同じであった。たとえば、声が小さい、早口である、学生にとって難しい言葉が使われる、などが原因と思われる。特に学生の日本語能力のレベルが低下してきているので、この点を考慮した話し方が強く求められている。

2.4 満足度と諸要因の関係

出席率（学習意欲）の違いによる比較

06年度前期の報告では出席率が40%未満の学生は、延べ人数で1%以下（168(40%未満)/19927(40%以上)）なので大勢に影響がないとしている。今回も前期0.8%（300(40%未満)/38000（40%以上））、後期0.7%（217(40%未満)/32209(40%以上)）と大勢に影響がでるほどの値とはなっていない。

履修者数と満足度との関係

学部学科ごとの受講者数と満足度（平均値）の関係を表 8 に示す。工学部を除き履修登録者数が少ないほど高い満足度が得られている傾向が見られるが、前後期を通じて T 部では受講者数が多くても満足度の高い授業がある。科目数が少ない場合は分析データとして有効とならないため、注意が必要である。授業内容が異なるため前後期の比較はできない。

表 8 学部学科ごとの受講者数と A7(満足度、平均値)の関係

後期 受講者数	科								
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J
-20	3.79	3.47	3.64	0	0	4.37	4.23	4.25	4.19
20-40	3.8	3.9	3.86	3.59	3.71	4.29	4.02	3.74	4.12
40-60	3.64	3.78	3.38	3.63	3.99	4.14	3.81	3.81	3.67
60-80	3.49	3.89	3.77	3.5	4.03	4.2	4.06	3.38	3.94
80-100	3.88	3.56	3.49	3.7	3.74	3.99	3.86	0	3.64
100-120	3.57	3.48	0	0	3.67	4.16	3.9	3.78	3.51
120-140	3.39	3.66	0	3.87	0	4.14	3.87	3.97	3.95
140-160	0	4	3.95	3.43	0	3.93	3.74	3.81	3.4
160-180	0	4.03	0	0	0	3.42	3.21	3.79	3.46
180-200	0	0	0	0	0	3.8	4.13	3.8	3.22
200-	0	0	0	0	0	3.68	0	3.64	3.22
計	3.71	3.79	3.62	3.62	3.81	4.18	3.89	3.82	3.59

教員年齢と満足度との関係

学部学科ごとの教員の年齢と満足度の関係を表 9 に示す。授業科目が前期後期で異なっているにもかかわらず、前期後期ともほぼ同様に年齢が低いほど満足度は高い傾向にある。田中¹⁾によると、これは「ハートとハートの直接性」(ルソー)による一般的傾向である。年齢が高くなるにしたがい、教員はこれまでに培った人生経験や教育技術を活かして、「直接性」の減退をカバーしなければならない。

表 9 学部学科ごとの教員の年齢と A7(満足度の平均値)の関係

後期 年齢	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
-30	4.06	3.75	3.94	3.67	0	4.18	4.25	4	4.25	4.1
30-35	3.83	3.87	4.07	4.12	3.64	4.43	4.06	4.33	3.85	4.11
35-40	4.07	3.99	3.86	4.03	3.96	4.36	3.98	3.99	3.91	4.04
40-45	4.09	3.78	3.8	3.56	3.78	4.32	3.91	4.33	3.91	4.03
45-50	4.48	4.08	3.85	3.59	3.96	4.33	3.77	3.86	3.66	3.99
50-55	3.65	3.7	3.62	3.59	4.15	4.19	3.82	3.83	3.58	3.84
55-60	3.5	3.83	3.69	3.78	3.7	3.89	3.91	3.55	3.23	3.65
60-65	3.57	3.68	3.26	3.51	3.81	4.25	3.85	4	3.95	3.74
65-70	3.61	3.48	3.6	3.57	3.6	3.56	3.73	2.92	3.11	3.53
70-	0	0	0	0	0	0	3.83	0	0	3.83
計	3.71	3.79	3.62	3.62	3.81	4.18	3.89	3.82	3.59	3.83

職階と満足度との関係

職階別では講師、准教授、教授の順に満足度が高いという傾向が得られている。前期後期についても多くの学科・学部でその傾向は変化していない。

表 10 学部学科ごとの職階と A7(満足度の平均値)の関係

後期		科									計
		C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
専任	教授	3.57	3.78	3.53	3.67	3.84	3.90	3.80	3.71	3.30	3.69
	准教授	3.90	3.77	3.78	3.47	3.94	4.27	3.82	4.04	3.89	3.91
	講師	4.18	-	3.89	3.83	3.55	4.58	4.05	3.92	3.89	4.07
	計	3.69	3.77	3.63	3.63	3.83	4.11	3.83	3.79	3.54	3.79
非常勤	講師	3.79	3.81	3.61	3.60	3.76	4.27	3.97	3.93	3.68	3.91

「科」は開講学科を表す

合併授業は含まない

授業時間と満足度との関係

授業時間別では特に傾向は見られなかった。ただし、1時限目と5時限目については授業数が少ないので、分析に用いる際には注意が必要である。

表 11 学部・学科ごとの授業時間と A7(満足度の平均値)の関係

後期 時限	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
1	3.56	3.88	3.39	3.59	3.94	4.11	3.8	3.91	3.86	3.89
2	3.72	3.68	3.77	3.52	3.77	4.3	3.97	3.89	3.65	3.87
3	3.61	3.87	3.65	3.86	3.78	4.16	3.92	3.54	3.5	3.81
4	3.78	3.79	3.51	3.36	3.85	4.13	3.82	3.78	3.44	3.77
5	3.94	3.75	3.54	4.02	4.2	3.55	4.11	4.05	3.62	3.78
計	3.71	3.79	3.62	3.62	3.81	4.18	3.89	3.82	3.59	3.83

選択・必修別と満足度との関係

選択・必修別では特に傾向は見られなかった。

表 12 学部・学科ごとの選択・必修別と A7(満足度の平均値)の関係

後期 履区	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
選択	3.73	3.8	3.61	3.58	3.74	4.18	3.87	3.83	3.63	3.84
必修	3.67	3.78	3.68	3.74	4.17	4.39	4.06	3.63	3.09	3.75
全体	3.71	3.79	3.62	3.62	3.81	4.18	3.89	3.82	3.59	3.83

科目別分類と満足度との関係
科目別分類では基礎・教養が高く、専門・専門関連は低い。

表 13 学部・学科ごとの受講者数と A7(満足度の平均値)の関係

後期分類	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
専門	3.68	3.77	3.49	3.61	3.85	4.21	3.84	3.88	3.44	3.84
専門関連	3.57	3.68	3.87	3.48	3.57	0	0	0	0	3.61
基礎	4.02	3.89	3.95	3.78	3.91	0	4.16	3.93	0	3.95
教養	3.6	4.08	3.81	3.64	3.82	3.96	3.91	3.44	3.79	3.78
教職	0	0	0	0	0	4.93	4.09	0	0	4.75
計	3.71	3.79	3.62	3.62	3.81	4.18	3.89	3.82	3.59	3.83

2.5 総合満足度の経年変化

授業に対する学生の総合満足度の経年変化を図 2 に示す。授業アンケートを開始した 2002 年度以降、総合満足度は上昇してきており、本学におけるこれまでの FD 活動が着実に成果をあげていることがわかる。

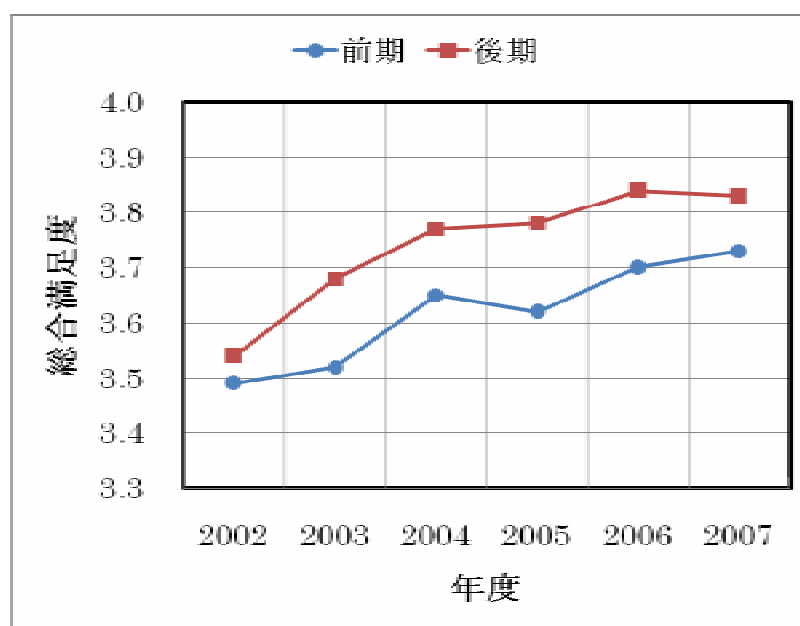


図 2 総合満足度の経年変化 (全学平均値)

3 まとめ

前期と同様にゼミ・実験・演習および履修者が 10 名以下を除く全授業科目についてアンケートを実施した。授業に対する学生の総合満足度と諸要因との相関などに関する分析結果は、授業科目を奇数・偶数のグループに分けて実施した前年度とほぼ同様の結果であった。また前期と後期による違いもほとんどなかった。

今年度、新たに加えた分析項目は「アンケート結果の公開・非公開」である。今年度よ

り公開希望調査を学科・教室単位で取りまとめる方法に変更した。その結果、前年度に比べて、公開率はほぼ2倍の約30%に増加した。一方、総合満足度の平均値は前期と同様に「公開」に比べて、「非公開」の方がやや高い値となっており、評価が低いことが非公開の主な理由ではないことが明らかになった。アンケート結果をできるだけ学生にフィードバックするためにも、さらに公開率を増加させる必要がある。

アンケート結果にもとづいて、どのように授業を改善すればよいのか、という課題についてはほとんど検討できなかった。この点については、たとえば石浦²⁾の「ダメな授業の典型例」や「良い授業を行うためのヒント」(パワーポイントと板書の比較)などが参考になるであろう。

参考文献

1) 田中毎実、「FDの義務化に向けて」、第4回高等教育政策研究セミナー報告書、pp.17-18、
京都高等教育研究センター「FD研究会」公開研究会、2007年6月、京都
http://www.consortium.or.jp/staff/center/report20070726_fd.pdf

2) 石浦章一、「東大教授の通信簿」-「授業評価」で見えてきた東京大学-、pp.117-120、
平凡社新書

以上

工学部授業公開実施報告

FD委員会委員・工学部FD委員長 島田伸一

2007年10月19日から11月16日の間に以下の4名の先生方の授業公開が行われた:

- ・中林幸三郎先生(数物)、
- ・井上雅彦先生(電気電子)、
- ・木多彩子先生(建築)、
- ・道廣一利先生(都市環境)。

参加人数は総計17名であった。授業公開された先生方からの報告書では、御自身の授業改善に役立ったと好意的な御意見を頂いたが、工学部FD委員会では参加人数が少ないので教員みんなの役に立っていないのではないかと。良い授業を参考にさせてもらっているので、参加者の参考になった意見を書くべきであった。批判めいた意見を書くのは授業公開の主旨からはずれているのではないかと、等の意見もあった。議論の後、次の方向性、課題が確認された:

- ・前期授業の公開ができるようにする。
- ・来年度も評価の高い先生に授業公開を御願いする。
- ・授業公開の報告書、コメントの公開について議論する必要がある。

以上

2007年度 薬学部授業公開報告

F D委員会委員 薬学部 太田壮一

【授業公開】

1. 日時 2007年11月12日(月)～11月16日(金)

2. 対象 全授業

但し、以下の先生を選定しモデル講義を行って頂き、授業終了後、担当教員の同意を得て、聴講した教員との間で意見交換会を行った。

選定された講義：

2007年11月13日(火) 1・2時限、「有機化学III」、表 雅章講師

【意見交換会】

表 先生を囲んで：11月14日(水) 17:00～18:00 (第3セミナー室)

【所感】

上記日程で授業公開と意見交換会がそれぞれ行われた。まず、授業公開に関しては、当初は我々教員が聴講するという事で、若手教員である表先生も若干緊張しているように見えたが、入念に授業準備をして、講義に望んでいること、並びにとても元気な声で、またはっきりした口調で、講義をしていたのが印象深かった。寝ている学生も皆無に近く、真剣に講義を聴いていた。薬学部の授業アンケート結果においても、30～45歳までの若手の先生の満足度が高い結果が観察されているが、その理由が十分にうなずけるだけの非常にすばらしい講義であった。一方、意見交換会では、予想以上の多くの先生に御出席して頂き、活発な意見交換が行われた。そして、多数の先生方から、表先生の教授法に対する建設的な意見やアドバイスが行われていた。私自身も授業スキル等に関して、今後取り入れていこうという指摘も多々あり、非常に有益な時間を過ごすことができた。

【表先生の感想】

「公開授業の感想」

この度は、公開授業に御参加を頂き、誠にありがとうございました。身の引き締まる思いで授業に臨んだ次第であります。後日の意見交換会で授業に関する改善点をご指摘頂くためにも、普段通りに授業を進めるよう特に注意した。いつものように、授業を開始して学生の意識をこちらに向けることの手さも披露できた。気の利いた話で学生を引きつけることができれば苦労せずとも授業に入り込めるのだが、今回もまた大きな声で学生を制圧して授業を進めた。意見交換会においてもこの点、つまり授業を始める際に学生の意識をこちらに向かせることの重要性をご指導頂き、これから改善できるよう努力したい、機化学という授業内容の性格上、反応機構の説明等で板書が多くなり、学生が書き写している時にも解説を必要とする場面も多い。このあたりの喋るスピードやペース配分が上手く調節出来ていないところが多かったように思う。この点については普段から注意している積もりであったが、この公開授業を行うことで改めて痛感した。「学生への問いかけ」も行っているつもりであったが、問いかけた後の考えさせる時間が短いとのご指摘を受けた。考えさせるために行う問いかけの目的が果たせていなかったことになる。これは大いに改善すべきところである。授業の中盤以降、学生の集中力が途切れだす頃にペースを緩めて一息つき、リフレッシュさせ、それから授業に再度集中させることが出来れば良いのだが、今の私にはそのような余裕は無く、単調な授業になりがちなところも改善していきたい。幸いにも、ご参加下さった先生方を特に意識す

ることもなく、普段通りの授業が行えた。学生の反応も普段通りであったように思う。このことから、今回の公開授業は、私の未熟なところや気付いていないところを露呈でき、正に改善すべきところをご指導頂ける良い機会となった。

「意見交換会の感想」

公開授業後の意見交換会では、改善すべき点を的確にご指摘して頂いた。例えばチョークの色使い、見やすい色を使うべき等のご指摘だけでなく、多くの色を使いすぎると学生が板書する際に手間が余計にかかり、話の流れに遅れがちになるとのご指摘があった。また、有機化学で多用する「ローンペアの点表記が分かり難い」や、「学生が板書する時間をもう少し与えるべき」とのご指摘も頂いた。これらのことは全て、学生の集中力が途切れる要因になり、結果として学生の理解低下に繋がるため特に改善したい。その他に改善すべきところとして、「学生への問いかけ」をもっと行うべきとのご意見を頂いた。さきに述べたように、普段から「問いかけ」を行っているつもりであったが、私が思っている以上に問いかけている回数は少なく、考えさせる時間も短いようである。一方、授業の良かった点として、「声の大きさ」や「言葉の明瞭さ」、「大事なことを繰り返し言う点」をご指摘頂いた。また、有機反応を暗記させるに終わらないよう、常に反応機構等を説明して理論的に理解させるような授業を目指し、普段から心がけているが、この点を評価して頂いたことは非常に嬉しく感じている。

様々な授業を行っておられる教員の方々に授業を聴いて頂き、学生とは異なった視点から、御意見をいただける貴重な場を持つことが出来たことは、非常に有意義であった。本意見交換会で頂いた御意見を大いに参考にし、今後の授業をより魅力ある授業に出来るように心がけたい。

以上

2007年度法学部授業公開報告

F D委員会委員 法学部 石井信輝

昨年度法学部は従前とは異なる形式で授業公開を行い、一定の成果を収めることができたため、本年度もその形式を踏襲した。

1. 実施の方法

実施期間：2007年11月16日（金）～11月30日（金）

（各曜日とも2回聴講可能とするように設定）

対象講義：各教員が申告した1科目

（授業概要やコメントを付した公開授業日程表を作成し配布）

アンケート方法：記名式。講義の内容・手法においてよいと思った点、およびその他よいと思った点を自由に記述。

公開授業の聴講：法学部各教員が1つ以上の授業を聴講することを義務づけ。他学部教員も聴講可能。

2. アンケートの結果

「講義の内容についてよいと思った工夫」については、5項目に大別された。1つ目は『説明の丁寧さ』の項目であり、「関連する科目との関係から説明がなされた」、「難解な言葉が分かりやすく且つ丁寧に説明された」等が指摘された。2つ目は『テーマの設定』の項目であり、「好奇心をそそるテーマ設定」等の指摘があった。3つ目は『講義の進行』の項目で

あり、「講義の途中でクイズ形式の質問をし、理解度を確認している」等の指摘があった。4 つ目は『講義用資料』であり、「レジユメのまとめ方が上手い」等の指摘があった。また 5 つ目の『その他』の項目として「講義の内容が豊富であった」等の指摘があった。

一方、「講義手法についてよいと思ったこと」については、4 項目に大別され、1 つ目の項目である『説明の方法』として、「親しみのある口調の使用」、「声の明瞭さ」等の具体的内容が指摘された。2 つ目は『資料の活用』の項目であり、具体的には「パワーポイントの利用」、「配布資料の質の高さ、豊富さ」等の指摘がなされた。3 つ目は『学生との関係』の項目であり、具体的には「学生の自主性を引き出す」等の回答があった。4 つ目は『その他』の項目であり、「法学検定問題を豊富に取り入れている」等の回答があった。

また、自由記述の欄には「学生参加型の講義であり見習いたい」や「世界で一番受けた授業の一つに数えられる価値あり」との回答があった。

3. 今後に向けて

新しい方法を採用した昨年度に比較すれば聴講がスムーズに行われ、制度的にも定着してきた感がある。しかしながら、それに伴う制度の形骸化も心配されるため、常に新しい試みも加えながら実施することが必要であると思われる。

以上

外国語学部の授業公開について

外国語学部 FD 委員長 朝日素明

外国語学部では、後期授業期間中の 12 月 3 日(月)から 12 月 14 日(金)までの 2 週間、授業公開を実施した。今回、授業を公開していただいた教員は 19 名で、学部の専任教員の約 4 割に相当し、公開された授業数は 20 にのぼる。公開された 20 の授業の日時が重なるということも殆どなくて済み、条件としては比較的整った授業公開日程であった。

今回の授業公開の実施にあたって、学部 FD 委員会としては、授業公開の可否、公開授業科目名と公開日時について事前にアンケートで調査し、その結果をまとめて案内、周知するという役割を果たすにとどまり、公開日程を調整する必要も特になかった。裏を返せば、全員公開を原則とするわけでもなく、また FD 委員が協力を依頼して回るということをしなくても、自主的に授業公開に協力を申し出られた先生方が約 4 割にものぼったということである。

FD が、教員各人が課題意識を抱き、それに基づいて自発的・主体的に実践、行動をとれるときに最も効果を上げるものだとすれば、今回の外国語学部の授業公開は特筆に値するものだろう。授業公開のきっかけは他律的なものであったにせよ、公開された授業はすべて担当教員の自主的な判断によるものであり、授業の参観についてもまた然りである。このような自発的・主体的な動きが静かに、しかし確実に広まっていくことを今後も期待したい。

以上

第2回法学部FDフォーラム

「法学部における基礎教育の現状と課題 - 基礎演習を中心に」

FD委員会委員・法学部FD委員長 三成美保

1 プログラム

さる2007年12月20日16:30~19:00、10号館プチテアトルにおいて、「法学部における基礎教育の現状と課題 - 基礎演習を中心に」と題し、第2回法学部FDフォーラムを開催した。シンポジウムのプログラムは以下の通りである（参加者は専任教員21名中19名）。

趣旨説明（三成）

総論：法学部学生の基礎学力について - 入試パターンとの関連で（松永信一准教授）

報告1：法学部における基礎教育の目的とその課題（糟谷英之教授）

コメント：スポーツ学生に対する基礎教育の課題（石井信輝講師）

報告2：法学基礎演習が直面する課題とその検討案 - アンケート調査の集計結果から浮上した要素を前提に（河原匡見准教授）

コメント：実定法教育の立場から基礎演習にのぞむもの（岡部崇明教授）

報告3：合同基礎演習の試みについて（家本真実講師）

コメント：基礎演習のさまざまな活用（櫻原義比古教授）

2 シンポジウム内容

趣旨：基礎演習は当初2年次配当であり、専門教育への橋渡しとして位置づけられたが、やがて1年次配当に変更され、大学生活へのガイダンスを含む担任制と目されるようになった。2つの課題はいずれも重要であるが、教員によって比重の置き方が異なる。そこで、事前アンケートをふまえて法学部における基礎演習のあり方について検討することにした。

松永報告：入学時に実施する英語・日本語プレテスト、法学部1年次配当専門科目（4科目）の成績と入試種別との関係を検討した結果、一般 公募制推薦 指定校推薦 専門・総合推薦 特別推薦の順で成績が下がる傾向が判明した。推薦入学者割合の増加傾向を考慮すると、受験勉強が乏しい推薦入学者への基礎教育が今後の課題として重要である。

糟谷報告：近隣諸大学における基礎演習の取り組みを比較すると、学習スキルと生活支援の2つを目的とする点では共通するが、関関同立クラスではスキル重視、偏差値下位校ではマナー指導が重視されている。教員独自の創意工夫と組織としての取り組みとの調和が不可欠である。石井コメントでは、特別推薦入学のスポーツ学生にも「のびしろ」は十分にあり、これをいかに引き出すかが課題になると指摘された。

河原報告：アンケート結果では、基礎演習の教育に何らかの困難を感じているとの回答が8割に達し、共通課題をある程度設定すべきという回答がもっとも多い。各教員が多様な工夫をしているが、法学部全体としてのサポートが必要である。共通テーマの設定・出席管理・連絡網の整備などが取り組み案として提起された。岡部コメントでは、「世間知らず」の学生に実定法の抽象的な議論をさせることの困難と今後の教育課題が指摘された。

家本報告：2007年度の3ゼミによる合同基礎演習の試み（映画・講義・法律リテラシー・判例学習等）が具体的に示された。互いのアイデアで補い合えるという長所がある反面、クラス担任という側面は薄れるという短所がある。櫻原コメントでは、基礎教育とキャリア教育を連動させる必要性が強く指摘された。

討論：前提とすべき学生像、共通教材の開発等について活発な討論が行われた。

3 今後の課題

本フォーラムにおける議論をふまえて、2008年度法学部FD委員会で基礎演習の課題(共通課題の設定など)に関して十分に検討し、2009年度実施にむけて具体案を作成する。

以上

外国語学部のFDフォーラムについて

外国語学部 FD 委員長 朝日素明

2008年3月5日水曜日午後4時30分から6時まで、7号館6階第6会議室において、第4回外国語学部FDフォーラムが開催された。外国語学部の教員、事務職員、さらに学長、教務部長あわせて28名が出席し、フォーラムのテーマ「基礎ゼミナールにおける教育指導について ゼミナール とゼミナール の連携を視野に入れて 」のもと、白熱した議論が繰り広げられた。

フォーラムの開催に先立ち学部FD委員会は、「基礎ゼミナール 」の担当教員に対しアンケート調査を実施していた。当日のフォーラムでは、FD委員の原教授から、アンケートの集計結果の報告とそれに基づく「基礎ゼミナール 」の「授業計画モデル」の提示があり、その後の討論では出席者から種々意見が出された。「基礎ゼミナール」担当者が真摯に取り組んでいる様子が覗かれるとともに、今後も議論を深め、よりよい「初年次教育」のあり方を模索していく必要性が確認された。

外国語学部では昨年度から「基礎ゼミナール」のあり方についてフォーラムのテーマを設定してきた。本学に入学してくる学生の能力に鑑み、確かな能力のモデルと教育システムを構築し、一刻も早く着実な実践を積み重ねていく必要があるとの課題認識は、学部教員にほぼ共有されている。しかし、「基礎ゼミナールをどうするか」は授業の枠組みのなかでの思索に留まりがちである。フォーラム閉会時にとったアンケートに記された、「基礎ゼミナール」のありかたについて根本にもどって考え直す機会がもてた」との意見も、授業の枠組みを離れて「入学後初期段階にある学生に対してどのような教育(初年次教育)が必要か」再考する必要性を訴える意見と読みとれよう。

そこで、「初年次教育」のねらい・内容を思いつくままに列挙してみると、「リメディアル教育」「学究活動への適応教育(スタディスキル、アカデミックスキル等)」「大学生活への適応教育(自己管理、対人関係、学業との両立、学びへの動機づけ等)」「専門基礎的教育」「教育相談・学習相談」等であろう。これらのうち、「基礎ゼミナール」でできることとできないこと、教務部 教育センターの事業と連携すべきこと等を検討し、「基礎ゼミナール」に固有の役割や機能を明確にしていくと同時に、他の初年次履修科目も含め、それらとの適切な分業 協業の関係を構築していく必要がある。そのうえで「基礎ゼミナール」に関しては具体的に、そこで指導すべき事柄はどのようなクラス編成と指導体制で行うのが効果的か、その成績評価・単位認定の基準をつくるか否かについて、検討の余地があるし、さらには、その単位修得を進級条件や卒業要件とするか否かということも俎上にのぼってくるだろう。

今後もこのような議論を活発に進める場として、同時に授業実践を通じての課題や成果を共有する場としてのFDフォーラムでありたいと願っている。

以上

2007 年度工学部 F D フォーラム報告

FD 委員会委員・工学部 FD 委員長 島田伸一

2008 年 3 月 13 日(木) プチテアトルにおいて「外部評価に向けた工学部の教育改善」というテーマで第 3 回工学部 FD フォーラムが開催された。参加人数は教職員総計 54 名であった。フォーラムは工学部長挨拶、教育貢献表彰、講演、質疑応答の順で進行的た。

1. 工学部長挨拶

西田工学部長より次のような挨拶があった。工学部 FD フォーラムは 3 回目を迎え、教育貢献表彰は 2 年目を迎える。表彰は 1 年の区切りではなく、長年の積み重ねの結果と考えるべきであろう。工学部が対外的に高い評価を受けられるように、教員には多方面の努力が必要となってくるであろう。

2. 表彰

教育貢献表彰推薦委員長の柴田先生からの説明の後、次の 3 部門で表彰があった。

- (1) 部門 1 - 教員の自薦および他薦による表彰
- (2) 部門 2 - 授業アンケート結果に基づく表彰
- (3) 部門 3 - 学生の記名投票の結果による表彰

3. 講演

都市環境システム工学科長 澤井教授より「外部評価に向けた工学部の教育改善」というタイトルで講演があった。受審のながれ、外部評価の目的、大学評価基準 11 項目について概略的な説明があった。つぎに、今年度同学科において受審した JABEE の 1 次審査の結果等の報告・説明があった。

審査において次の点が高く評価されたと報告された(各学科に共通するもののみ抜粋)：

- ・ 自己学習を促進する仕組みとしての予習・復習シートの仕組み(添削して返却し再提出させる。主要 10 科目で実施)は高く評価できる。
- ・ 多様な学生に対してのリメディアル教育を含む学習支援体制(工学部教育支援センター)や、基礎ゼミ・などの一貫した少人数教育も充実している。
- ・ 教育システム評価委員会・教育改善委員会・教員間ネットワークが十分に機能していることを確認した。

一方改善すべき点としては次を報告された(抜粋)：

- ・ 入学方法や編入学法についての開示が不十分である(規定があいまいであり、具体性に欠ける)。卒業研究などについて、学習時間との関連性が具体的に説明されていない部分がある。
- ・ 教育改善を行う組織の目的、構成、内規などの整備が不十分である。

これらを説明された後、今後に向けた C 科の改善への取り組みについて話された。

4. 質疑応答

澤井先生による講演に対し、会場の参加者より質問があった。応答は澤井先生がそのまま担当された。印象に残ったものを 1 つ挙げる。

Q：対象学生の達成度は教員の努力に見合うものか？

A: 見合うものであると思う。学生もそう思っているだろう。なにより教員の意識が高くなった。

5. 追記

このフォーラムのポスター作成は A 科西村研究室 井内、北村両君に御願いました。フォーラムの後、ポスターの背景画像として使われていた白い花は春に咲くイキシア、その花言葉は「団結して当たろう」ということを両君から教わりました。

以上

2008 年度 経営情報学部 FD フォーラム

FD 委員会委員 経営情報学部 田中克明

2008 年度 経営情報学部 FD フォーラムが下記の通り開催された。約 40 人の教員が参加し、講演後積極的な質疑応答が行われた。

記

1. テーマ 授業改善の具体事例報告 について
2. 日 時 2008 年 3 月 5 日(水) 15 時から 1 時間
3. 場 所 ゼミ室(5) 11 号館 8 階
4. 内容
 - (1) 本学部 非常勤講師 米田幸弘先生(社会学、社会学 担当)の講演
テーマ 「授業方法に関する記述式アンケート結果のフィードバックによる学生の意識変容」
 - (2) 質疑応答

以上

関西地区 FD 連絡協議会へ加入しました。

FD 委員会幹事：教務課長 喜多 勤

関西地区 FD 連絡協議会とは、FD の法制的義務化が平成 20 年度から本格実施されるなか、京都大学高等教育研究開発推進センターが中心となり、関西地区の大学と連携しあい、人的資源や情報を相互利用することにより、FD・教育改善を促進していくことを目的に設置された互助組織です。

センター長の田中毎実さんに、FD とは何か？と聞いてみました。「目の前の学生ときちんとした授業を作っていくこと。そのために、まず教師から変わってみよう、それが FD だ」と即座に回答がありました。また、講演会、合宿研修、学生による授業評価アンケート、授業研究会……多くは、米国から輸入したままの形で行われているだけ。単なるイベントに終始していると指摘されています。今後は、関西地区 FD 連絡協議会と連携しながら FD 活動を推進していきたいと考えています。

FD 委員会から

- * 皆様からのご意見を紙面でも紹介したいと考えています。随時、メールで結構ですから、FD 委員もしくは教務課 (kyomu@ofc.setsunan.ac.jp) までお寄せ下さい。
- * 次号の FD ニュース第 24 号は 2008 年 7 月頃に発行の予定です。

